

相俟つて、最近の日本において、篤學の上に於て中世史料の研究が着實に進められつつあることは注目しなければならぬ。特にこの種研究がわが國において甚だ出版に困難なる事情から考へて、刊行物を通して吾々の眼に觸れるものは恐らく研究業績の一端にすぎないものであらうことを思へば、わが國の中世研究も近來意を強くせしめるに足るものがあるといへよう。

本書の中で問題研究的なものとしては、「古ゲルマン民族の國家生活」、「傳カール大王御料理令文獻考」、「封建制度研究における一傾向」、「中世獨逸における國家統一の問題」の諸篇であるが、それらの各篇について逐條解説檢討することを紙幅が許さないことは遺憾であるが、これらの諸篇の間に論理的な聯關を統一とは認められないにしても、各篇がそれぞれに現下の中世研究の嶄新にして且つ核心的なる問題に觸れ、而も問題の定位が甚だ確實であつて研究の歴史並に學說の本流支流に通達し、最新の學問水準に立脚して容細なる文獻をも忠實に顧慮し、論斷は概して控え目に嚴正を保持して學問の正道を固持し後進をして導らしめない態度は敬服すべきであるといはなければならぬ。例へばカール大帝御料地令(Capitulare de villis)の研究は今世紀の始めドブシュの劃期的なる研究によつて學界に未曾有の波紋を投じ今世紀の社會經濟史研究の出發點を劃した問題であつたが、著者はドブシュ以後の研究を一括して研究史上に更に一步を進め、その恩師に當るドブシュ教授に對しても嚴格なる批判的態度をもつて臨んでゐる。

「中世獨逸における國家統一の問題」もフォン・ペローの中世國家

論以來の形式主義的法理論的中世國家論の行詰りを打開すべき時期に際して著者の論旨が示唆を與ふところが甚だ大いと思はれる。

本書に收められた諸篇は悉く政治、社會、經濟に關するものであつて精神史については全く觸れられてゐない。然し著者は東京商大の教授であるといへその行き方は所謂狹義の經濟史家とは全く異つたものであるといふことは最も特筆すべき點であらう。即ち所謂經濟史家が常に經濟理論によつて見方を拘束せられてゐるのを常とするのに反して、著者は殆んど何等の理論を前提せずして常に史料から出發し、その領域もまた敢へて經濟に局限せずむしろ政治經濟の相關の中に歴史を見んとするものの如くである。

最後に一言したいことは本書の諸論は必ずしも落着くべき結論に達せず却つて場合によつては新しき問題を提起し豫見せしめることに終つてゐる點が尠くない。それは本書の缺點でなく却つて學術的價値の高いことの證據であるが、然しこれら未解決の點に關して更に第二第三の論文集が現れることを吾々は學問の發展のために待望して止まないものである。(弘文堂發行、B5版、三三〇頁、定價四圓參拾錢)(鈴木成高)

政治史の課題

中山治 一著

「國家把握の問題が、單なる學問的關心にのみか、はる事柄でな

いことはいふまでもない。それは、人間存在そのものに向けられた最も根本的な問ひの一つに他ならないであらう。少くとも私自身にとつては、それは生と死にかゝる問題であつた。：私は今でも尚ほ、私を乗せた御用船がまさに祖國の港の岸壁を離れようとする時の門出の瞬間に、甲板上に直立する私自身を襲つた、あの異常な衝動を忘れようとしても忘れることは出来ない。：戦地にあつて私は、若し生きて再び故國の土を踏むことがあるならば國家把握の問題を取り上げてみたいと思つてゐた。そして、應召前の私の學問的關心を惹きつけてゐた問題の一つは、ドイツ史學思想の歴史であつたが、幸ひにもそれは國家把握の問題を核心として展開されるべきものをもつてゐた。斯うして私は、召集解除後機會ある毎に、斷片的にはあるが、ドイツ史學に於ける國家把握の問題を考へてきたのである。十九世紀ドイツ史學は、政治史として展開された。しかし、何故それは政治史でなければならなかつたのか、またその場合所謂『政治史』とは如何なる意味であるのか、更に：その歴史主義は『國家』を如何に把握したか、またそれは十九世紀末から今世紀の初頭にかけて如何なる時代的變化を経験しなければならなかつたか、：これらの間に答へることが本書の課題であるであらう。本書成立の所以や、著者が何を此處に其切實なる課題として探究せんとしたかは、著者の右の言葉以上に多くを語るを要しないであらう。而も其は、餘りにも切々として吾々の肺腑を衝く言葉でさへある。

而して著者は、自らの課題を探ねんとして、十九世紀以降凡そ

一世紀間に於けるドイツの精神科學思想を劃する三時期(序参照)を夫々代表するランケ、トライチュケ、マイネツケの三人を拉し來り、此等巨匠達の國家把握、政治への理解は如何に行はれたかを、獨逸史學の展開の線に副つて辿らんとしてみるのである。

私は、本書の課題の解答に最も近いものとしては、トライチュケの篇が特に優れたものではないかと思つた。又、マイネツケの紹介は、恐らく吾國に於ける最初の、最も要を得て纏められたる傑作ではないかと思ふ。そして最後には、本書は尙課題の存在の探究に重點が置かれたが爲、一般讀者は、恐らく著者自ら一兵卒として祖國を離れんとした時、又戦地にあつても解答を試みんとした問題の明快なる説明を、更に切實に著者に望むのではあるまいかと思つた。然し此等總てを今此處に著者に期待することは、本文庫の性質として不可能たる事に屬するのであらう。

嘗て私は、一言苟くもせざる傑作の紹介は、其内容を其儘再録するの外あるまいのではないかと思つた事があつた。そして今又私は、畏友中山尊兒の本書を紹介するに當つても、果ねて此事を想ひ起すのである。私は、或は本書の内容に就ては殆んど觸れる事はなかつたかも知れない。限られたる紙數に對しては、其内容とするもの餘りに多く且深く、又問題も多いからである。従つて私は唯、アリストテレスの「人間はポリス的存在である」との命題を信じ、又新しき世界史を創造せんとする日本人としての國家意識、政治的自覺の徹底を痛感しつゝある讀者に、讀者悉くが、此從軍學徒が築きあげた稔り豊かな學業に接し、教へ學ばれんこと

洵に多かれと切望するのみなのである。(定價五拾錢、教養文庫
110、弘文堂發行(西井克巳))

印度洋問題

伊 東 敬著

印度洋に關することが一般人の注目を惹き出したのは本年三月末より四月初にかけての帝國陸海軍の印度洋作戦開始以來の事であらう。それはシンガポール占領、ジャワ裁定が契機となつたもので、アンダマン諸島官領に始まり、コロンボ急襲が之に續いた。營業本位の諸雜誌が慌て、印度及び印度洋に關する何らかの記事

を求め出したのはこの頃である。しかしその多くは印度本土に關するものであつた。印度に就いては研究者が甚だ多い。また研究とまで稱し得ずとも之に關心を持ち、或は一度旅行した経験を有し、何らかの機會に發言したいと待機してゐる人もまた少くない。印度に關する單行本が輩出し出したのもこの頃で、それは驚くべき多數に上り、他の南方諸地域に關する出版物に比し遙かに多いやうに思はれる。多くは「神祕の國印度」といふやうな見出しに始まり、地勢、氣候、民族、宗教、産業、貿易等を一通り解説し、最後に對英關係を持つて來るといふ行き方である。紀行文も多く出された。譯書も出た。K. S. Shetyankar の The Problem of India の如きは二種の翻譯をへ出てゐる。このやうな印度關係書

の氾濫の中にあつて、僅かに光つてゐるのは脇山康之助氏「現代印度の諸問題」、綜合印度研究室編「印度の抗戦力」ぐらゐのもであり、その立場に於ていさゝか承服し難いところありとするも他に比して眞面目な仕事であることは認めてよろしからう。

このやうな印度關係書、それも大同小異のもの、氾濫——それは出版文化協會の統制の存在を疑はしむる程度のもので——の中にあつて、印度洋と名の付く書は一冊も現はれ出なかつた。従來印度洋は我々日本人にとつて何となく裏側の感じがあつた。それはヨーロッパへの通路であつたが、太平洋に於けるが如く幾多の問題を含むとは思へなかつた。換言すれば、それ程イギリス支配が決定的であり、イギリスは印度洋帝國と言はれ、印度洋はイギリスの湖水であつて、そこに問題の發生など望むべくもなかつたのである。獨伊の西方よりの攻勢も未だにこの形勢を打破することが出来なかつた。大東亞戰爭の開戦は一瞬にしてイギリスの印度洋に於ける地位に決定的打撃を加へた。こゝに始めて印度洋問題が發生したと稱しても差支へあるまい。今まではたとへ問題が存したとしても、それはイギリスの問題であつたのであるが、之からはそうではない。

かゝる際に伊東敬氏の「印度洋問題」が出された。同じ著者による「現代印度論」は一昨年十二月の出版であるが、現在の多數の印度關係書の先驅をなしたもので、極めて常識的ではあるが、穩健概ね正鴻を逸せぬ好著として文部省推薦となり、其後出版された同種の書でこれに及ぶものは少い。私は印度關係書なる言葉を使ふけれども、之は印度に關する邦語文獻が未だに少しも専門化さ